

第3回桜川市立小中学校適正規模等検討委員会議事録

開催日時 平成20年12月3日（水）

午後7時～午後9時

開催場所 桜川市役所大和庁舎3階大会議室

出席者

委員：平田雅巳、鈴木克己、櫻井信文、藤田尚雄、永瀬清光、古谷田進、鈴木清、海老原睦、安達尚志、桜井晃司、西岡義広、鈴木孝雄、小林武廣、金澤真知子、鈴木好史、川那子秀雄、小高友徳、大武茂樹、櫻井昇

事務局：学校教育課（廣澤、吉原、藤田）

会議の前に第2回検討委員会の議事録の確認、茨城県PTA連合会の広報紙の記事の紹介がある。

委員長： 第3回検討委員会を始めさせていただきます。

（第2回検討委員会協議内容の確認をする。）

今日は、中学校における小規模校のメリット・デメリットについてご意見をいただきたいと思います。まずは先生方いかがでしょうか。

委員： 今までの教師生活の中で一番小さな学校に勤めております。現在6学級しかありませんが、特別不便だな、不自由だなということは感じてはおりません。が例えば学習面で先生の数ですね、やはり5教科については2人の先生を確保したいなと思っています。お互いに切磋琢磨する必要もあるし、情報交換をする必要もあります。現在は幸いなことに加配もありますので5教科については2人ずつおります。芸能関係の先生も1人ずつおります。

委員長： 学習面についてお話をいただいたんですがいかがでしょうか。

委員： 教師ひとり一人の生徒への影響が大きいということが挙げられると思います。何人か一緒にやっていたらだいたい同じ方向に行くのですが、1人で一つの教科を持つということになりますと、その先生の影響力が生徒にかなりあるということになります。ですから良い先生ばかりなら良いんですが、ちょっと考え方が違う先生になると、プラスの方向ではなくマイナスの方向にもなりうる、ということになります。ですからその辺になりますとどちらを向くのか、舵取りが学校としてはたいへんになりますので、生徒への影響はあるのかなという感じがします。

委員長： 小規模の中学校は、先生の影響力が強いということですね。

委員： ○○委員さんにお聞きしたいんですけど。約倍の生徒数の学校に移られたということですが、先生の配置という話があったんですけど、先生の人数はどうなのでしょう。

委員： 倍にはなりません。学級数規模に応じて県の方で配置人数が決まっておりますので、その人数割り当てで動くだけです。現在の学校は加配等を含めまして27人というところで動いておりますが、前の学校は18人でした。生徒数というよりは学級数に応じてということになっています。

委員： 最近、市によってだいぶ差がありますね。市独自に採用しているところも結構あります。学習面だけにかかわらず、例えば司書教諭とか、生活指導員とか、理科とか数学とか英語とか、市によってだいぶ差があります。市独自で教員を採用しているところもあります。

委員長： 県から配置された人数以外に、市独自で採用しているという市があるわけですね。桜川市は、市独自でというのは無いんですよね。この周辺ではありますか。

委員： 以前にあったのが総和町、10年くらい前になりますか、町独自で採用したという例。近年では鹿嶋市が新聞に出ておりましたね。

委員長： それは学習面での手当てをするための方策でしょうね。小さな小・中学校ですと、例えば体育とか音楽の先生は1人になってしまう。ですからさっき言われた小規模中学校においては先生の影響力が強いというのは、その1人の先生の指導力で決まってしまうからですね。それをフォローするために地域独自で採用して手当てをしている市町村があるということですね。茨城県ではどれくらいあるんでしょうね。市町村独自で小中学校の教員を採用しているところは。事務局で調査をお願いします。中学校の場合高校進学がありますから、対策が必要かと思われれますが。

委員： 中学の場合進学があるということなんですけど、100パーセント進学と考えてよろしいのでしょうか。

委員： 100パーセントに近いですね。何らかの形で進学をしているのが現状です。各種学校を含めて。

委員： 私の時と比べると私立の高校に進むケースも多くなっているかと思うんですけど、大体が公立の高校に進学しているケースが多いんでしょうか。

委員： 傾向としては、先を考えた場合、大学進学を考えて関連の私立高校を選ぶ場合がかなり多いですね。

委員長： 今は県立も合格者の3分の1位を推薦で取っちゃう高校もあるんですね。試験を受ける者も私立とだぶって受験するんですね。

委員： 今年の場合は1月9日に茨城県の私立高校は統一で単願の推薦ということであります。あと併願でその後に試験があります。その場合は、県立との併願ですから後で切り替えしながらやるような形になります。1月9日に受験して合格すれば私立ということになります。

委員長： 進学を考えた場合、小規模校のメリット・デメリットはありますか。

委員： 意見があるんですけど、小中学校適正規模検討委員会ということで役所が要するに教育委員会がどのように考えているのか、ということが主眼になって来るであろうと思うんですよ。例えばメリット・デメリット、これは小中によっても地域によってもいろいろあるかと思います。これを深くつっこんでいっても、学校によって状況が違うわけですから、校長、先生の資質によって、あるいは教育目標によって違って来るであろう。地域差というものはあると思うんですね。国あるいは県が方針というか指針というかそういう進路を、何とかやってくださいと持ちかけて来たんだと思うんですよ。それに対して、どういうのが良いんだろうという方向に行くんだと思うんですが、第2回の中で財政の問題とか地域のこととか出ましたが、なるほどと思う部分もあります。この検討委員会をどのくらい開くんだか分かりませんが、答申をするということになれば市長に対して最終的には行おうと思うので、要するに桜川市の教育委員会がどういうふうにしたい、どういう方向に持っていきたい、基本的にはそういう方針が根底にはあるんだろうと考えるわけです。桜川市の適正規模をどの基準にするのか、それを最終的には答申していかなければならないわけで、そういうところに切り込んで行ってもらった方が、議論も活発になるんだろうと思います。メリット・デメリットは確かに存在しているわけですから。その中でそれをどうしようか、まとめなければならないということになれば、学校の合併によって数々の問題が生じているわけです。それをどのようにまとめるかということが桜川市の教育の方針というところに行くんだと思

います。どういう答申をしてくれ、そういうところに行かないと結論は出てこないと考えます。こういうことが出てくれば、議会でも十分に審議をしてもらおう。早く答えを出すべきなのか、時間をとるのかということをやっていたらばよろしいのかなと、そのような方向付けを私自身はしていただきたい、これは私の意見です。

委員長： ○○委員さんのご意見内容は分かりました。県でも適正規模の指針は出されているわけです。ただ適正規模のために数あわせで適正規模の学校を創ることはいけないと私は思います。あくまでも学校というのは地域の文化のセンターですから。歴史がありますから。ですから子どもの学力向上をどうするかとか、それだけではだめで地域の人々がそれをどう考えるか、ということも必要です。そのために小規模校というのはどういうメリット・デメリットがあるのか、それをたたき台にしてそれを積み上げていって、それでは桜川市としてどうしたらいいのか、そういうふうに私は考えています。

委員： 私も理解できますけども、要するに市教育委員会では最終的にはどういうふうに考えているのかが問題になるわけですよ。その中で話し合ってくださいよと、どういう方向に考えているわけですか。

事務局： 私の立場としてこの場でなかなか言える立場ではないんですけども、教育委員会でも検討をし、ある程度の方向性は持っておりますが、この検討委員会での協議がその方向性に近づいていけると思っています。

委員長： 委員としての委嘱期間も再来年の3月までなんです。その間にこの検討委員会を月1回程度開催して、だんだん積み上げて教育長に答申したいと思っています。その答申を受けて教育委員会は態度を決めると言うんですよね。

委員： 私は旧岩瀬の出身ですから、小規模校の最たる学校もあるわけです。しかし、ひじょうに歴史もあるし、地域の方々を巻き込んでやっているすばらしい学校だと思っていますから、複式だからそういう学校を無くしていくのか、そういうことに関しては私は反対をする立場になるわけですよ。要するに小規模だから、大規模だからどうしようということは、人件費なのか、この中にも書かれていますが耐震化で金がかかる、しかし、学校というのは赤字でやっていくものですよね。ですから市が学校教育に掛けていく、そういう方針を出してくれれば問題はないわけですよ。

委員長： 第2回の検討委員会での小学校の小規模校のメリット・デメリットについても、今〇〇委員さんが言われたように、小規模だからデメリットではなくて、素晴らしいことがあるんだよ、さっき私が報告したように意見として出ているわけです。そういうことを十分ふまえてこれから答申していきたいと考えています。今日は小学校をふまえて中学校のメリット・デメリットについてお聞きしたいということです。そういうことでご了解をいただきたいと思います。それでは元に戻しまして、中学校の学習面についてのメリット・デメリットのご意見が出ましたが、学習面以外で中学校には中学校として特色ある活動があると思うので、その点でいろいろと地域の方々の協力を得ながら進めていることがあると思うんですが、いかがでしょうか。

委員： 私は旧大和東中学校卒業です。その当時はだいたい5クラスあったわけですね。現在の大和中学校、部活動など様々な影響が出ていると思います。その中で先生方も一生懸命やってくれています。父母会が気持ちを大きくして学校へのバックアップという形をとっていかないといけないんじゃないか。我々の頃は先生に殴られたって自分が悪いんだ、と親がそのように躡けているわけです。今の子どもは逆です。自分が悪くても、親が私の子どもは一番しっかりして勉強が良くできるんだと思っていますから。それではいけないんじゃないのかなと。学校に預けた以上は先生に任せる。そういう形でやっていただければ大和中学校に限らず繁栄していくんじゃないかなと思っています。

委員長： 父母の会、PTAのバックアップという話が出ましたが。

委員： 一部そういう保護者もいますが、だいたいの方はそうではない。どちらかというと学校の先生と保護者とで、どうしたら子どもたちが良い学校生活を送れるか、そういう形で日頃まとまって子どもたちをみんなで見ていこうという形でやっております。先ほどから話にでていますが、大きい・小さいというのはそれほど問題ではなく、どれだけちゃんととまれるか、という問題になってくると思います。大きくなれば大きくなったで各地域いろいろあるので、そういうところを調整していかなければならない。そういうところを抑えておけばまとまっていくのかなと思います。

委員： 昨日テレビで見たんですが、東京の墨田区で小学校、中学校の統合をしたわけですが、子どもたちにアンケートをとったら7割以上が統合して良かったと。中学生は部活に反映が出たということです。それに対して父兄は、心のコミュニケーションがとれなくて、地域の防犯体制などがと

れなくて心配だというのが4割、ということをしてテレビでやっていました。だから子どもたちが統合になって健やかに仲良くやっていけるかですね。

委員長： この間地元の中学校の文化祭に行ってきたんですけど、父兄の方の協力は頭の下がるおもいです。子どもたちと一緒にやってましたが、子どもたちの体育館での発表以外の校舎の外の活動というのが、PTAの方々の活動が目立ってましたね。ああいった学校への協力体制というのはすばらしいと強く感じました。

委員： 私は大和中卒業ですが、その前に大規模の中学校にいました。1学年8クラス。その学校はスポーツ部も文化部もこの辺にない数、スポーツはすべての種目、文化部も演劇部からいろいろな部活がありました。それだけ人数がいるのですべての部が部員が多く、部活動をやっていない生徒がいてもすべての部が運営できた。自分で選ぶこともできるし、いろんな刺激を受ける場面もありました。逆に、大和中をみるとスポーツ部が3つ、文化部も1つか2つしかない。その部も今部員が足りない。存続の危機にあるということを見ると、子どもたちにはもっと選択肢を与えてもいいのかなという感じがします。後もう一つ、いろんな話の中で保護者が学校に対してバックアップという話がありましたが、私は子どものときからずっと親が学校の草刈りをしている姿を見たことはありませんでした。自分が親になって初めて学校の草刈りに参加しています。生徒数があるかもしれないんですけど、子どもたちにはもっとそういうことをやらせていいのかな。現在はすべての学校事業に対して親が出ている。親は自分でやっちゃえば早く終わるからすべて手を出しちゃう。じゃなくて子どもたちのペースでやらせれば、子どもたちの自主性が伸びるのかな。ましてや中学校というのは大人になるための準備ですので、この間高校生と話をしたんですけど、自分から進んで何をやろう、かにをやろうという子どもたちが減っている。PTAでこれから問題にしなければいけないのは、学校に対して保護者がものをやりすぎる、手を出し過ぎじゃないのかな、という考えを持っています。これからもっと考えなければいけないのは、今の子どもたちがこれからの社会で、どう生き抜いていかなければいけない状況にあるか、ということですね。私たちが子どものときを考えると、子どもがこれから大人になる上で環境が全然ちがうわけです。例えば中学校、高校を卒業した後、就職口が皆無に近いですよ。就職難が続きますから。ということを考えたらどういう人間に育てるべきなのかなと。今までの考え方は通用しないと思うんです。その辺を保護者なり、学校なり、まして教育委員会が入って桜川市のビジョンをしっかりと骨を1本作ってそれから枝葉を分けていくべきなのかなと。先ほど〇〇委員さんから教育委員会の考え

どんなの持っているのかと言われたときに、これが桜川市かな、と思ったのは、教育委員会からこれですということが一つもないんですね。統廃合に関しては濁さなければならない部分もあるかもしれませんが、統廃合を抜きにして桜川市のビジョンが出て良かったのかなと、素直な気持ちです。

委員： 私、大和中の野球部の外部指導員をやらせてもらっています。そういう点で部活から見ますと、やっぱり人数が少ないので1学年でチームを作れないんですね。そういう点では人数の多い学校と対戦するときにはハンデを感じるんですが、ただ同じ練習を同じ時間だけ全員でできるので、落ちこぼれる子どももほぼいない、みんな平均点以上の実力と体力を付けている、というメリットもあるんですが、先ほど発言がありましたけど、子どもに合併して良かったかと聞くときつと部活を考えると、ちょっとできる子は多くの人数でできるので当然という答えになると思うんですが、先ほど言いましたように少なければ少ないなりにメリットがあるんですが、そういうところですか。もう一つ、中学校の保護者として一言。うちの娘がバスケットをやっているんですが、やっぱり人数が少ないです。そうすると市の負担もたいへんなんでしょうが、良い悪いは別にして親の負担も人数が少ないと大きいですね。人数の大小にかかわらず同じ金額のバス代がかかりますので、遠征費だけでも負担が多くなってしまいます。

委員長： 小さな学校でも県で優勝したり、選抜に選ばれたりとすばらしいことだと思います。

委員： 部活動という形で続いていますので関連で。中学校の小規模という部分になってくると、部活動が十分できるかどうかという部分が大きな話題となると思うんです。桜川中の場合、昨年度の資料がありますけど、部活とすると野球、サッカー、男女バスケット、男子バレーがなく女子バレー、昨年まで男女卓球があったんですけどそれをやめにしたという経緯があります。それに剣道、柔道、そして文化部として吹奏楽部という形ですか。そういう部分でいうと部活動で見た場合に文化部が手薄かなというのが私の感想です。卓球部がなくなったという部分においては、正確ではないんですけど、どうしても運動が苦手という子どもの場合、野球、サッカーではちょっとなじめないな、という部分でかといって文化部が吹奏楽部だと音楽が苦手だと、どこがいいかなというところ卓球に集まる。そうすると他のところが手薄になるという状況からして、本当は運動を苦手とする人たちを入れてあげられる、活躍させてあげられる場所があればいいんですけどない、かといって他のところに支障があってもまずいというような流れ

の中で卓球部が中止になるというふうになったかなと思っています。ただ部活動も大切なんですけども、全員参加ということが今原則になっていまずけれど、全員参加しなければならないという決まりはないんですよね。そこを全員参加という形にしている主な部分とすれば、一つはそういう形で授業が終わった後の時間を部活動というものを通してやってもらうことによって、こういう表現がいいのか悪いのか分かりませんが、非行という部分からも無駄な時間を過ごさないという意味合いからも全員参加という形で実施している。もしそれを自由参加という形にしたときに全体がどういうふうになるのかなと不安がある部分もあってその部分はなかなかできない。もう一つは苦手と思っていることでも、いやいやかもしれないけれどもその動機付けによって努力することによって、力を付けられるという意味合いからも部活動は進められている、やった方がいいよと強く進められるんだと聞いていますけれども、そういう解釈でよろしいんでしょうか。

委員： まず基本的に共通理解していただきたいと思うんですが、部活動については現行の学習指導要領には一言も書かれておりません。つまり、学校の先生方がやっている部活動というのはあくまでも現在のところはサービス、ボランティアで実施しております。ただ、平成24年から実施される学習指導要領にはちゃんと明記されております。従って教育課程の関連が出てくると思います。それから部活動の教育的効果というのは大きいものがありますよね。そういうことで実際には桜川市の場合は全校全員加盟という形で実施していると思います。ただ、最近はクラブチームというものが出てきまして、例えばサッカーとか、あるいは硬式野球もありますし卓球などをやっているところもあります。水泳は実際には学校にはないですよ。スイミングクラブだと思います。そういうふうな傾向も出てきております。

委員： 学校の中での部活動の位置づけで、学習指導要領には厳密に言いますと「特別活動など」の「など」の部分に入っている、詳しく言いますと総則の3にありますし「体育向上については、学校教育活動全体を通じて行わなければならない」というような1文があったりと、そういうふうなところで実際動いているのが現状です。ですから、やらなければならないもの、ということではなくて学校独自でやっていくものというふうに、部活動についてはしていった方がいいと思います。まして、対外試合という場合には、部活動の場合にはねらい的には楽しくやることもだいじなことです。ひとり一人が伸び伸びと余暇の時間を使って生涯学習、生涯スポーツの観点からそういったことをすることは、ほんとうにだいじな活動だと思って

おります。ですから、そういう時間をできるだけ学校として確保したいということで学校経営上、今現在やっているのが現状です。また、競技ということになってしまったりすると、人数がどうしても集まらないと勝負にならないところもあります。できるだけ今までスポーツ少年団などでやってきた、そういった者の特技を生かしてあげたいというのも、中学校では一つの考え方としてあります。ですからバレーボールをやってきた子どもは中学校でもバレーボールをやれたらいいなという、保護者や競技団体の希望もあって、中学校ではできるだけ設置する形には現在なっているかと思います。ですから、少年団と中学校の部活がうまく連携ができたりしているのが現状かと思います。そういう意味で先ほど出ました発言で、卓球が無くなったということに関してはスポーツ少年団の中に卓球がなかったということもありまして、小学校でやってきた得意な部分を残しながら、一気になくすのではなくて学年が上がってくるときに募集を継承していくという形でやってきたわけですが。

委員長： 中学校の部活の話が出ていますけれども、私も中学校の部活というのは人間教育の場じゃないかと思うんですね。教室の中だけでの勉強だけで部活がなかったらどうなっちゃうんだろうと。高校に行った家の近くの男の子に、進学校に行ったんですが、高校でも部活やってるのか、と聞いたら、やってると言うんですよ。部活やって大丈夫なのか、って聞いたら、部活やんなかったらパンクしちゃうと言うんですよ。放課後に部活をやるとすっきりする、って言うんです。剣道をやってる子なんですが中学校で初段をとって、高校で3段をとるんだとがんばっていると聞きましたが、そういう意味では部活の意味というのは大きいんじゃないかと思います。

委員： メリット・デメリットはあると思いますが、それを裏付ける客観的なデータがあった方が議論が進むんじゃないかと思うんですよね。部活動でいえばどのくらいの規模の学校が県大会で上位を占めるのか。確かに地域差はあると思うんですけど、地域差から見れば市街地の方が高いということが出来るんだと思うんですけど、規模から見てどういうことが言えるのか、そういうデータがあった方が進みやすいと思うのですが。

委員： ただ勝つということを考えた場合に、中学校から始めて県で勝つということは今は稀じゃないでしょうか。ほとんどスポ少なり、あるいはクラブなりでやっているのが現状かと思うんですよ。うちの方でバスケットが強いのもそうですし、野球もそうです。中学校から新たにはじめて県で勝つなんていうのはないと思います、現状は。

委員長： 小学校時代にスポ少で活動していた子が中学校に行ってその道に進んでくればね。

委員： さっき話に出た大和中学校ではどうなんですか。小学校の頃からやっていたんですか。

委員： 野球部に関しては小学校時代からですね。現在、野球部のメンバーを見ると1・2年生で15人しかいないんですけど、14人はスポ少経験者ですね。3年生まで入れると21人なんですけど3年生で2人経験していない子がいます。大会の上位という話になりますと、先生方の前で失礼なんですけど、人数よりはいかに顧問の先生が熱心にご指導していただけるかというところが一番大事になってくると思います。人数じゃないと思います。

委員： 数の面から見てどうなる、そういうデータがあつていいんじゃないかと思います。

委員： 学校の先生から聞いた話なんですけど、私は岩瀬西中なんですけど、西中と東中と岩瀬でライバル同士なんで、部活などはここ数年どの部も東中の方が強い。それは何でかと東中にいた先生に聞いたんですけど、そして何年か前に週休2日制に移行したときに岩瀬では中学校の部活の練習を、土曜か日曜のどちらか一方を休みにするという約束事があったらしいんですけど、ところが何年か過ぎて東中の保護者から土曜と日曜どちらも練習をやってくれと学校に頼んで両方練習をやるようになったんです。それから東中が部活が強くなったんですよ。もう西中と東中では常に東中の方が上位に行くと。これは部活の練習時間に比例していくと。ただ先生からすれば土日の一方休みが取れるというのはそれが良かったらしいんですが、2日間とも出るとなると先生の負担はたいへんだと思うんですが、東中の先生たち熱心にやってくれたんで、東中の部活はどんどん強くなっちゃいましたね。

委員長： 規模からすればね、東中の方が小さいですけどね。

委員： 今話を聞いてますと、これは教育委員会の人事にもよるんですよ。私の知りうる限りでは西中は女性が多くてね、当てはめて顧問という形にしている。ですから今言ったように野球を強くしようと、その指導者がいない、他に移ってしまう。この前西中の入学式を見ましたら女子の先生が多いんですね。だからこれでいろいろな部があるようですが、ただ名前だけ、や

らざるを得ないだろう、学校側としてはね。だから強くしようとかそういうことはやっぱり学校長さんも難しい立場に立たされているのかなというかんじがします。それと今全員部活をやらないかん、そういうことも昔はなかったわけで、野球、体操、バスケット、バレー。剣道とか柔道とかは昔はなかったわけですから。私は今空手道の後援会長をあるところでやっているんですけど、中学校へも武術だから学校長に頼んだことがあるんですよ。でもなかなかできない。学校の校長さんがだいたい決定するんですね。指導者を選定するというのはできないんですよ。現状はそうなっている。女子の先生ばかりでは部活動の先生になっても無理なことは無理なんですよ。そういうことがあるのかなという気がしますね。東中では昔、卓球が強かった。その先生はずーっとそこにいたんですよ。どういう訳でいられるのかと思いましたけど、やっぱり教育委員会の人事配置で決まってくると思いますよね。だから全員部活に入らなければいけないというのも、私から見ればおかしい部分があるなという気もするんですよ。先生の顧問とかはなかなかできにくい現状じゃないんでしょうかね。

委員： それはそうですね。現状としてはたいへんな部分だと思います。先ほどもいいましたように学校の先生は、もともと部活の顧問をやるためにやってはいませんからね。自分で得意な分野を持てればいいかもしれませんが、否応なしに、あんたこれを持ってくださいと校長に依頼されるわけですから、そうになったら持たなければならない、そういった状況にあります。それから、教員にも家庭がありますからね。自分の家庭は犠牲にしてやってくれているわけですからそういう部分もあります。いろいろな問題があると思います。それから、学校があんまりにもね、成長期のすばらしい子どもたちを預かりすぎているのかなという感じも一面ではします。それと今学校に一番求められているのは学力ですよ。学力を付けろ、ということは国でも県でも市でも一番最初はそうですね。学力向上ということはどの学校でも第一の課題にしていると思います。

委員： 難しいですよ。学校の先生方、顧問をしてその学校の名前を挙げよう、なかなか難しいところがあるんじゃないか。これは大規模校とか小規模校とかに限らず、そこは一番学校長が苦心をされてるところじゃないのかなと思います。

委員長： なかなか中学校の体育面の部活の顧問として適する教員とか、文化面のそれぞれ音楽部とか吹奏楽部とかいろいろありますので、それに対応できる教員の配置というのはこれは難しいと思います。というのは教員採用で100人採ったとしても柔道の有段者は1人か2人でしょう。剣道も2人

か3人でしょう。そういう先生方が配置されて柔道部の顧問だ、剣道部の顧問だとされるわけです。そうしなければその学校の教育活動が進まないわけですから。しかし、自分ができなくてもやらなければならない。まるっきり素人の先生が顧問をやって県大会で優勝させるなどという例もあるんですよね。一生懸命勉強してね。だからその辺に先生方の悩みもあると思うんですね。たいへんだと思います。

委員： 結局部活を通してどこに目標を置くかという部分だと思うんですよね。主だった大会に勝つとかという話になってくると、また別の話になってくると思いますし、中学校という生活を通していく中での一つの分野として、体力向上とか規律とかそういうものを身に付けるという形においての部活であれば、多少顧問がどうのこうのという部分を除いても成り立っていくだろうと思いますし、親の方が望んである意味では先生方に無理をしていただいているわけですね。確か先ほどの委員さんが言ったように、土日のどちらかは原則休みのはずですし、月曜日も休みというのが中学校の部活の原則だと思います。ただ大会の前になったりすると融通を利かせて特別やりましょうかというのが、本来の中学校における部活なのかなと思います。そういう部分でいうとあまり求めすぎてもいけない部分かなと思います。そうすると別段少人数で和気あいあいとやっていく活動であっても、それは人数が少なすぎて困るということには部活においてはならないのかなと思います。あと、一生懸命されている方には水を差すような話になってしまうんですけども、11月6日に茨城教育の日で水戸で大会がありました。そのときに講師できたのが数学者で大道芸をやってるピーター・フランクフル氏で、彼はその講演の中で部活を目の敵にしていました。それはなぜかという、家族と子どもを分断して、要するに年中子どもを学校に縛り付けてしまう、中学に入ったならば家族旅行も極端に言えばできない、親が連れても行けない、そういう部分で家族関係を希薄にしてみよう、過度に練習をする部活というのは困った存在だ、というような講演をしました。それがすべてとは思いませんでしたけれども、そういう見方からすると、ただそこから解放されたからといって、それを受けて親子で何かをすとか、見に行くとか、体験を重ねられる家庭ばかりじゃないこともまた事実なんですけれども、そういう部分では目から鱗の意見を聞いたかなという気がしました。そういうことからすると、中学校、どういう形がいいのかと考えたときに、どうしても部活が活発じゃないから一緒にした方がいいんじゃないとか、集めた方がいいんじゃないかというようになってくる訳ですけども、中学校においてどういう部活がいいのかという部分をよく考えないと、それがメインの理由で、部活が元気にやれるんだから一緒にした方がいい、集めた方がいい、というように傾いてしま

うと思う。そういう部分で〇〇委員がおっしゃられたように、メインは学習なんだと、それプラス、委員長がおっしゃった息を抜いたりする部分で部活は大事だし、訓練を繰り返すという部分も大事だし、規律も大事なんだけれども、あまりにも部活優先になってもまずいんじゃないのかな、というふうに感じます。私の長男は剣道部だったんですけど、ある夕方「地球のステージ」という八郷で開催されたそれに連れて行こうと思ったんですけども、子どもが休めないというんですね。部活をやめて来いよと言ったんですけども言い出せないんですね。そういう部分でいうと、一生懸命もいいんだけどあまりにも、それが行きすぎてしまうと、そういった経験をさせようとしたときに気後れして、そういうことも言い出せないでしまうという雰囲気が出てしまう、というのもまた困るかな、と経験したことから言うと統廃合ということを考える部分においては、部活というのはそこそこの部分でいいのかなというのが私の考えです。

委員長： 部活についての考え方はいろいろあると思うんですが、今の話の講師の先生の経歴はどんな経歴か私は解りませんが、今のこの時代に部活に対して真っ向から反対という考えを持っているというのはあまり解せないんですがね。というのは、子どもたちを鍛える、どこで鍛えるんだというときに中学校部活これは大事だと思いますね。一生の特技それができるのは中学校の部活です。就職してから会社でそしていろんな場所でそれが役に立つんですよ。部活は先ほど先生方から出ましたように、先生のサービスでやっている、確かに建前はサービスでも実際は中学校の教員となった以上は本分と同じような意識でやってくださっているんじゃないかと思うんですよ。そうしなかったら教育的活動はできません。やるからにはきちんとしたルールで、きちんとしたマナーをたたき込んで技術を教え込んでそうしてやらなかったら対外試合なんか望めないし、そういう活動が部活ですから大事な教育の場であって、中学校の人間教育の道場みたいな場になっているんじゃないかと思うんですがね。そういうところで小規模校と大規模校の差というのは、小規模校には小規模校の良さがあるし、大規模校には大規模校の良さがあります。そういうことで部活動の問題点等がありましたらご意見をいただきたいと思います。

委員： 問題点ではないんですけど、この前高校の先生から聞いた言葉で皆さんに紹介したいんですけど、その先生は有名私立校の特進クラスの担任なんですけど、そのクラスの中での1・2番の勉強ができる生徒がその担任に向かって、「なんで返事をしなくちゃ行けないの、なんで目上の人に敬語を使わなくちゃいけないの」と平気で言うそうなんです。どう指導していいか私困っちゃった、という先生も情けないと思ったんですけど、そうい

う事実も、さっきの校長先生の揚げ足を取るわけでもなんでもないんですが、やっぱり何かの土台の上に乗ったうえでの学力だと思うので、確かにそういった子どもがいるという事実を知ってもらいたいと思いました。

委員： 部活については一つの目標を設定してそれに向かって進んでいく訳ですから、やればやっただけ達成感はあるわけで、人格形成上も有意義だとは思いますが、今までみたいなやり方だとどうしても教師の負担が大きすぎますよね。そのあたりを考えなければいけないのかなと、教育行政の問題になってしまいますが。外国なんかでは教師が日本のように部活を見るなどということは、先進国ではないですね。負担は減らした方がいいんじゃないかと思うんですがね。

委員長： 今は顧問の先生がいないときは、練習はできないんですか。子どもだけの練習というのは。

委員： 本校でやっているのは、まずスタートの時に20分程度は行事指導をして、今日やること、それと顧問がいないんだから危険な練習はしないというようなことを指導をして、とにかく会議もありますので会議をやる、そういうことでやっている場合もあります。

委員長： 休みの日の練習は、顧問の先生は出ますね。

委員： これは出ます。

委員長： そうすると先生方負担が、休みの時に出勤するという形になるわけですね。

委員： 実際には中学校の場合には、放課後会議を持てないですよ。月曜日は部活がないので入れてますが、平日に職員研修とかそういうものはできないですね。先生方、部活には原則として付かなければならないんですが、自分の事務もありますよね。例えば今でいえば進学関係をやってますからね、面談もやらなくちゃならないし。ですから年がら年中付いててやるというのは現実的には不可能に近いと思います。

委員： 顧問の先生というのはたいへんな責任を持っているのだと思います。以前、岩瀬西中の体操で、たまたま顧問の先生が離れていて、練習をして落ちて歩けなくなってしまった。町でも補償ということで相当な金額を支払ったわけですが、その子のその後を見てると何千万という補償費をもら

っても間に合わない人生を送らなければならない。そういう意味では、もし事故が起きたら顧問の先生はその場にいらなくても責任は要求されるわけですよ。その辺にむずかしい点があると思いますね。〇〇委員さんが言ったように、勝負にかけて来るのか、普通の教育の中で和気あい藹々としたクラブにするのか、ということは非常にむずかしいと思います。私は近所に住んでいますから西中をよく見ているんですが、ブラスバンドなどは土日も関係なくやっていますよ。その成果が結果として出ているんだと思います。生徒に引っ張られているのか、教員が引っ張っているのか分かりませんが、ものすごい練習量ですよ。目的に向かって進んでるぶん、位置するところがあれば、夢中で、勉学を忘れてやることも大事じゃないか、とそういうふうに考えますね。大規模校がいいのか、小規模校がいいのかということは、そこにPTAが存在し、先生方もいらっしゃるわけですから、学校の特色を生かした方向性を見つけていくべきだろうと考えます。特色を出して部活の教育もするということも、これから親の方も考えていかなければならない、というふうに考えますね。

委員長： いろいろと中学校の大規模校、小規模校についてご意見をいただきました。

（以後、本日出された意見をまとめる。その後、次回第4回検討委員会の日程を1月21日（水）午後7時から大和庁舎3階大会議室で開催、協議の内容を「アンケート調査について」とすることを決める。

委員長から給食センターについての協議については、後日の休日か夏休み等に現地視察等を実施してから協議をすることの提案があり、了承する。）